

# たぐみ

## Craftsmanship

特集1 阿部眞土作陶展

特集2 益子の浜田窯

第3号

### ふだん使いの工藝品

いま私の手元に昭和八年四月に刊行された「濱田庄司陶器集」がある。青山二郎の編集で大正十二年のセントアイヴス窯の作から、琉球窯、京窯、益子窯など昭和七年までの作品を網羅する。それを見て感心するのは、八十八点に及ぶそれらの作品のほとんどがふだん使いの食器だということである。湯呑、土瓶、急須、飯茶碗、小鉢、取皿、酒器、醤油注のどれをとっても、濱田が終生作りつづけたものの出発点であることがうかがえて興味深い。

十年ほど前のことだが、学生時代の恩師のI先生(K大名誉教授)にお会いしたとき、「浜田さんの食器を家では今でも愛用していますよ」と話された。昭和十七年のある日、軽井沢の別荘で使う食器を買うために、学生だった先生は母と一緒に浜田庄司の窯を訪ねたのであった。

「その後東京の家が空襲で焼けて、戦後建て直したとき、軽井沢から食器を運んで大事に使っています。とくに醤油注は毎日お世話になっていますよ。」

I先生に限らず、柳宗悦(むねよし)の民藝運動の仲間であった河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉たちの作品を、多くの愛好家の人たちが決して鑑賞愛蔵のためではなく、もともと日常に使うものとして求められ、大事に使ってこられたことを私はいま、なつかしく思い起こすのである。

そういえばむかしたぐみでは、河井、浜田作品を作者の箱書付で買われる方は多くはなかった。島岡達三作品も含めてほとんどの方が、家で邪魔になるからと箱から出して、中身の作品だけを抱えて持ち帰られたのである。

いま時代は大きく変ったが、だからこそ秀れた品をふだんに使うことによって、日常生活にふたたび真の美しさを取り戻したいと心から希っている。

(志賀直邦)

## 釉の二重掛け

阿部祐工

釉薬を二種類重ねて施釉する事を益子の浜田先生のもとで教った。益子の水瓶や挿鉢に掛っている茶色の柿釉でも、一度釉を仮焼して、少し強い透明釉の上に掛けると、全く違った釉と思へる程変化に富み発色が素晴らしい。たまには油滴さえ出るときがある。

愛媛の砥部で食器の小規模産産をしたときの事である。（昭和二九年～三年）そろそろ薪が不自由になって来て、薪焚の倒焰式丸窯を重油焼成に改造した。当時の重油は硫黄分の含有量が多く、木灰を使った昔風の透明釉では焼き上りが黄色味を帯びてしまうのであった。

木灰の代りに蠟石を用いたタルク釉ならば黄変はないと云ふので、呉須―藍絵の顔料―の発色の為に（呉須を咲かせると云った）絵付後木灰釉を掛け

て、その手をそのままタルク釉にくぐらせて二重掛けをする事とした。黄変は見事に改良され、タルク釉一枚奥で染付は綺麗に咲いてくれたのである。

柳先生が民藝館の来客用として、七宝つなぎのそば猪口を一俵たくみから御買上げ下さった。当時の荷造はワラ包み請け負い方式で、一俵八十個から百個位の人数であつたらう。ある日、染付評論の大家と自称するT氏が来館して、そのそば猪口で茶を頂いて「柳先生、今どきよくこんなに揃ったのがありましたね。大正ですか」と云はれて、大笑いになったとか。生産者としては勲章をもらった以上に嬉しい話でした。

おりしも松本の中央構材工業㈱では、池田三四郎氏が木工工作所の機械化もどんどん進め、リーチ先生も度々松本を訪ねて英国家具の指導に当られるとかの情報があり、手仕事から機械生産への置換は、良きにつけ悪しきにつけ急速に進む情勢であつた。

手仕事と機械工業との接点と云ふ永

遠の命題に取り組む日々であつた。手仕事の伝統と力が音を立ててくずれ落ちて行くのを横目でにらみながら思った。なぜ人間は利益を手にした喜びに、美と体感した歓喜を売り渡してしまうのだろうか。

最近の製造現場をみると、チャップリンの映画モダンタイムスを思い出す。昨今の機械生産の染付食器をみるに、実に精密で原画と寸分違わぬ絵付ながら何も匂つて来ない。造花なのである。

かつて砥部で共に苦勞した二十人の仲間が懐かしい。ものを良くする為には敢然として工程の倍加を容認する姿勢。喜々として二重掛けをしていた小母さんが眼に浮ぶ。半世紀昔の事になる。小さな中小企業は、理想的システムに近づいた途端倒産して終った。悲しい事である。

いま私は、確かなものを作ることに歓喜出来る、若い作家の憤起を望んでやまないのである。

（国画会会員）



## たくみ企画展 阿部眞土作陶展

会期 三月二十六日(水)～三十一日(月)  
三月三十日(日)は営業します。

会場 たくみ二階サロン

東西の磁器のなかでも中国官窯のと  
りすました美しさとはちがつて、李朝

や古伊万里のもつ、何とも言い様のな  
い美しさと親しみのある肌合いに魅か  
れるという眞土さんである。彼の人柄  
もまたそのような温か味と正直さに溢  
れ、誰からも好かれる。

浜田庄司先生の高弟であった滝田項  
一、父阿部祐工の両師に学んで確かな  
技術と創作への強い意欲を身につけ、  
しかもたゆまぬ精進をつづけている。  
多くの先人のたどった道を歩み、日常  
の食器を中心に作りながら、生活に華  
をそえる工夫もおこたらない。会を重  
ねるごとに眞土さんの作風に幅が拡が  
るのも故なしとしないのである。

このたびの会も、ファンの方たちの  
食卓を彩どるよい機会となるだろう。

展示会予告

## 筆谷桂作陶展

会期 四月二十六日(土)～五月一日(木)  
会場 たくみ二階サロン

桂は小さい時から少々変わったところ  
があつて、中学を出ると宇都宮短大付  
属高校の調理科へ入学した。

卒業後焼物をやりたいと言ふ。これ  
は自分から言い出した事で大いに結構  
と、とりあえず栃木県立窯業指導所の  
伝習生として一年間ロクロの基本を勉  
強してから私の許へ来た。

もともと物作りが好きだったから、  
水を得た魚の如く生き生きとロクロに  
励んだ。六年間で随分上達したと思  
うが、一人前の陶工として立ってゆくに  
は成形だけでなく、釉、絵付、焼成も  
身につけなくてはならず、これからの  
勉強が大事である。私もあと数年頑張  
って彼の生長を待ちたいと思ふ。

島岡達三



一輪立 花生 4,500 円より



湯呑 3,500 円より



番茶器揃 30,000 円



飯碗 10,000 円 どんぶり 6,000 円



麦酒呑 4,000 円より



筒型花生 3,500 円



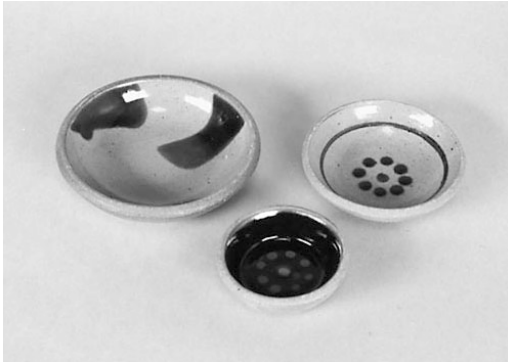
向付 汁椀 2,500 円より



後手急須 16,000 円 紅茶碗 4,500 円

## 益子の浜田窯

浜田晋作



浜田窯の取皿

英国でバーナード・リーチとの仕事を済ませて帰国したとき、ある人に、これからどういふものを作るのかと尋ねられて、若き日の浜田庄司は、日常の暮らしに役立つものを作りたい、抹茶

碗を作るよりは湯呑を作りたい、と云つて、大正十三年にかねてからの念願であつた益子に定住を決め東京をあとのした。

水甕、挿鉢、土瓶など台所の雑器を多く市場に出していながら無名に等しかったこの地で、はじめての作家としてのスタートをきり、以来全く新（あらた）ての仕事をはじめた。

かなりの抵抗もあり試練のすべり出しではあつたが、このことはやがておこつた従来の益子焼の不況を救うことにつながり、全国の民陶の産地にまで影響を与えた。

また作陶生活と並行して続けられた柳宗悦、河井寛次郎等との民芸運動とも相俟つて大きなブームの因（もと）を作り、多くの工芸作家の輩出ともなつた。

「私の仕事は、京都で道をみつけ、英国ではじまり、沖繩で学び、益子で育つた。」と語り、材料の全てを地元だけでまかない、益子の仕事振りに素直に

合わせて終始し、「益子焼」の再認識を世に問い、工芸界のみならず美術界にも多くの足跡を残したことはひろく知られるところである。

昭和四十三年、七十四才で文化勲章を受け、昭和五十三年一月五日八十三才にて旅の人となつた。

その後は次男の晋作が土地柄を生かした無理のない作風で、作家としての活動、用の器としての工房作品の製作との二本立てで、時代に押されて少なくなつた登り窯を今も守っている。松薪、けりろくろ、昔ながらの釉薬などと合わせて、浜田窯にはまだ古き良き益子が自然と生きている。

二代目としては兎角（とく）安易に先代の写しが多い中では頑固（とく）とも思える程、真似されて駄目になった人もなく、真似してよくなつた人もいないと云いつつ、危なげのない仕事で庄司時代とは違つた世界をしっかりと拓いていきたいと思つている。

## 武州と八尾の鯉のぼり

古川正夫

第一次「月刊たくみ」は、昭和二十七年十月に創刊され、三十一年十二月二十四号をもって終刊、短い命でした。その二十八年から九年にかけて、私は「東京近郊民芸めぐり」を無書名で連載しています。十六号（二十九年四月刊）、「武州コイの巻」で、その頃の鯉のぼり産地埼玉県の加須に、外国人客何人かを連れて、仕入先の作業場を見学取材しました。そのルポの最後の結びに、「鯉のぼりよそのを見せて我慢させ」なんて下手な一句をものせ続けて「こんな惨めな思いでなく、どんな街のどんな子供たちの上にも自分の鯉のぼりがひるがえる姿を想像することとはなんと平和なことであることよ」と、センチに締め括っています。

志賀さんにお聞きすると、鯉のぼりは今富山県八尾の吉田桂介さんから仕

入れている由で、八尾和紙の話におよび私は懐かしく思いました。私の記憶にある吉田さんは、当時まだ三十代の壮年で、黒い太縁の度の強そうな眼鏡をかけた童顔温厚な方で、新幹線もない交通不便な北陸の奥地からよく出張され、その度に蒲田女塚の芹沢銈介先生の工房に私もお供してお仕事のお打ち合わせに同席しました。

その頃吉田さんの紙工房は、芹沢先生のカレンダーや萌木会同人の型染和紙を、型紙もしくは図案をいただき製作していて、そのため芹沢先生とのお打ち合わせに度々上京されたのです。

富山県八尾といえは、「おわら風の盆」でも有名です。これを背景にした高橋治著「風の盆恋歌」（新潮文庫）というテレビにも芝居にもなった冴々とした不倫小説（不倫に冴々はおかしいが）があり、それを読んでいた私は、「風の盆」に憧れるところがあり、八尾には是非行ってみたいと思うようになって

いたところ、一昨年友人に誘われ否応もなく風の盆に飛びつきました。

八尾に入って私は吉田さんを買っ先にお訪ねしました。吉田さんは、工房における和紙製作のほか桂樹舎和紙文庫という手書き和紙に関する地方僻地にしては立派な美術館を主宰され、廃校となった小学校校舎を町から払下げられ、解体移築して民家風趣のある木造建美術館としたのです。町の周辺部を流れる井田川のほとり、閑静なところに位置し、折柄「風の盆」の人出で館内は賑わい、外出から帰りたいまや八尾の名士となられた吉田さんを、ぐるり挨拶のため二重に取り囲んだ来館者に遮られ暫し私の出番がありませんでした。吉田さんは、私とウン十年お会いしてないのに私のフルネームまで覚えておられ、第一声が「あなたとよく蒲田の芹沢先生のお宅にお伺いしましたね」には恐れ入り、記憶力抜群なことに、私は驚きました。



海外の工藝

## 北朝鮮の石工品

近くて遠く実情のよく判らない国、北朝鮮ですが、たくみでは、三年ほど前までは何回かにわたって石の工藝品や蘭草の敷物などを、伝手があつて作つてもらい輸入していました。

北朝鮮で作られる品々は、時間がかかりますが昔ながらに誠実な仕事で、値段も安く、人びとの逆境が伝えられるたびに心が痛みます。石の鍋や香炉



足付香炉 32,000 円



羽付鍋 17,000 円

なども飢餓のひどかった四年ほどは、作る人たちの消息すらつかめなかつた由、一日も早い政治、経済の安定が望まれます。

朝鮮では古代から薬石で食器具が作られ、特に北部の七宝山近くで産出する七宝山薬石は成分がすぐれ健康や長寿に最適といわれます。

たくみでいま店頭にある品は香炉や筆筒、蓋付の鍋の大小いろいろ、節句に使う蒸器など。数に限りがありますのでお問い合わせの上お求め下さい。

## あとがき

芭蕉の句に「笈も弓も五月に飾れ紙織」（奥の細道）というのがあつて、東北地方で江戸時代には紙の鯉のぼりがふつうだったと知れる。

東北六県は今も良い手仕事が残されているが、その啓蒙、情報誌として出色なのが、秋田手仕事文化研究会代表三浦正宏）から月刊で出されている「秋田手仕事たより」である。

平成十一年十一月から休むことなく出され今年二月で三十九号を数える。B5判のこの冊子の内容についてはいづれ紹介したいが、「たくみ」復刊について、会を主宰する三浦さんからひと方ならぬ励ましと手助けをいただいたことを記し謝辞としたい。（S）

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二二三五六五九

定価 六〇円（税込）

たくみ歳時記

## 八尾の和紙製品

幽玄な「風の盆」で有名な富山県八尾町は、古くから富山の薬売りの売薬の包み紙づくりで栄えた町でした。楮（カミ）で漉いた和紙作りは在の村々で、小分



紙子の製品。鯉のぼり、手提げ袋、札入れ、しおり付ブックカバーなど。

け用の包み紙は町で加工して業者に卸すというふうには地域一体の仕事でした。それがだんだん薬の行商がおとろえたことで、包み紙以外の、和紙を使った多様な製品を作るようになりました。その中心となったのが桂樹舎の吉田桂介氏で、便箋・封筒などの文具から写真のような紙子（かみこ）のものまで、さまざま

まな製品が工夫されました。

紙子とは、楮紙を手もみしたもみ紙に型染めをし、水洗いして最後に防水加工をほどこした丈夫な紙です。この丈夫さと発色のよさで、写真のような、鯉のぼり、手提げ袋、札入れ、文庫（小箱）、しおり付ブックカバーなど楽しい商品がいろいろ登場しています。

どの商品もたくみでお取扱いはありますが、これからの季節、鯉のぼりはいかがでしょうか。

この鯉のぼりは、型染した紙子を筒状にし、竹ひごの芯で丸い口を作り、ひれを四枚つけて作ります。少々雨にぬれても色落ちしないので、窓から出して薫風の中を生き活きと泳がせてみたいものです。写真の鯉は、体長五八センチで一尾四三〇〇円です。サイズは他に、八〇センチと一メートルがあります。また、鯉二尾と吹き流しのセツトもあります。

（豊岡）